

# 仮象と反省

——ヘーゲルの矛盾概念の理解のために——

山脇 雅夫

## 序

ヘーゲルの論理思想をその根本において特徴づけるものは矛盾の概念であろう。彼は、矛盾を全ての運動の原理として捉え、矛盾をうちに含むかぎりにおいてものは動き、活動すると言う。ヘーゲル哲学の面目は事柄を固定的な状態においてでなく動的連関において捉える点にあるから、矛盾の概念が方法的に格別に重要であることは明らかである。しかしながら、ヘーゲルが言う矛盾とはいかなるものかという点について定まった見解があるわけではない。一例を挙げるなら、『ヘーゲルの体系』の大事をもつて

ヘーゲル哲学の体系構成に関する問題を提起したV・ヘー  
スレは矛盾の概念を分類し、ヘーゲルは存在論的な意味で  
の矛盾律を否定しているが、アリストテレス以来の伝統的  
矛盾律は否定していない、と主張している。<sup>(1)</sup> 他方K・デ  
ュージンはヘーゲルが伝統的矛盾律を否定しようとして  
いたと主張している。<sup>(2)</sup> またH・シユミッツはデュージンの  
の見解をテキスト上明らかであるとして支持しているが、  
同時に、ヘーゲル自身が自分で言っていることと、彼の論  
理学のなかで実際に起こっていることとのあいだに区別を  
設ける必要を指摘している。<sup>(3)</sup> このように、矛盾の实在を主  
張する際にヘーゲルが伝統的矛盾律に反することを意味し  
ているのかどうかについても見解は分かれている。

この問題を詳細に論じるには、ヘーゲルのテキストに登場する様々な矛盾概念を逐一検討し、その意味するところを確定していかなばならないだろう。なによりまず、ヘーゲル自身が矛盾概念を主題的に取り扱っているテキストである「論理の学」「本質論」のなかの矛盾のカテゴリの分析が求められるであろう。だが、わたしには、そうした本格的な考察に先立ってなされるべきことがあるように思われる。すなわち、本質論の矛盾のカテゴリが「論理の学」の体系構成のなかでしめる意味を確定し、矛盾のカテゴリの位置価を明らかにしておくべきであると考えられるのである。

矛盾のカテゴリは、「本質論」のなかでは「同一性」、「区別」、「矛盾」といった反省規定の一つとして論じられているが、そもそも反省規定とは何を意味するのだろうか。反省規定はしばしば「論理の学」全体の方法原理を扱うものとされる。<sup>(4)</sup>しかしわたしは、反省規定は実在の構造を記述するものであり、本質論の行なう実在の構造分析のなかで特定の位置を占めるものであると考えている。というのは、ヘーゲルは反省規定を「規定された仮

象」(二五一頁)と呼んでおり、仮象というカテゴリは本質論の実分析のなかではっきり限定された位置を占めているからである。このことから、反省規定とはなにかを問題にするためには、仮象とはなにかということがまずもって問われなければならないことがわかる。また、「規定された仮象」という概念規定のうちの「規定された」という要素は、反省規定のカテゴリに直接先行する「規定的反省」から生じてきたものであるから、反省規定とはなにかを確定するためには、仮象とともに規定的反省もまた解明されねばならない。これらを考察することは、結局、反省規定というカテゴリの生成過程を跡付けることに外ならない。

以下本稿では、仮象、反省の順に、その意味するところを明らかにしていこうと思う。あらかじめ本稿の主張の要点を述べておくなら、仮象の分析において、この段階での本質と存在とが自立化していないことが示される(一)。反省の分析を通して、反省の運動の自己同等性から導き出される独特な存在概念の持つ具体的意味が考察される(二)——。次に、存在と本質に即した規定との間の関係が考察さ

れる。そして、ここでの実在が直接的なものと媒介的なものとを総合した構造を持っていることが示される(二—二)。最後に、本質に即した規定がどのように客観的妥当性を得るかが考察される(二—三)。これらの考察を通して、反省規定がどのような実在の在り方を表現するものかを明らかとすることが、本稿での私の目標である。

## 一—一、仮象の存在性格

存在の真理態は本質である、とヘーゲルは言う。その場合、存在とは直接的なデータを表すカテゴリの総体のことであり、本質はその直接のカテゴリに媒介されたカテゴリのことである。「論理の学」では、第一巻存在論で直接的存在のカテゴリが扱われ、第二巻本質論で被媒介的本質のカテゴリが扱われる。「論理の学」の叙述が第一巻から第二巻へと進んでいくことは、存在とはなにかを追求する問いが直接的なデータに留まり得ず、直接的データを越えた本質へと進んでいかざるを得ない、とヘーゲルが考えていることを示している。

ここでまず問題となるのは、本質が媒介されたカテゴリであるという場合の、その「媒介された」という事柄の意味である。一般に媒介とは他者との関係を通じた規定を受けているということであるが、本質を特徴づける媒介とはどういうものなのだろうか。この問題を考えるうえで示唆的であるのが、ヘーゲルの次の発言である。「知は、存在のうしろに存在以外の何かがまだ存在し、そしてこの背景が存在の真理であると前提して、存在を越えていく」(二四二頁)。われわれとしては、ここでヘーゲルが使っている「うしろ hinter」という言葉に注目したい。先にわたしたちは、媒介とは他者との関係を通して規定を受けることだといったが、本質は存在にとって「後側」にある他者なのであり、本質は自分の「前」にある存在という他者との媒介関係のうちにある。換言すれば、本質と存在は「横並び」の関係にはない。

このことをはっきり思い浮べるために、幕に映る影絵とその幕の後ろにある実物との関係を考えてみよう。たとえば、幕にテーブルとその上の林檎の影が映っているとすると、テーブルと林檎は上下の位置関係にあり、互いに対し

て他者である。そして同時に、二つとも同じ幕のうえに映る影である。これらの影が幕の後にある実物に対して持つ関係は、幕に映るもの同士の間係とはまったく異なっている。なぜなら、幕に映る像は同じ幕という地平のうちにあるが、後にあるものはこの地平そのものにとつて他者であるからである。本質を存在の「後」にあるものとするのは、本質が存在の地平そのものを越え、存在の地平そのものと他なるものであるという事態を示していると考えられる。本質は存在という地平そのものを越えるという仕方(5)で媒介されているものである。

さらに、先の引用部分後半は存在と本質の間係について基本的なことを確認している。つまり、存在の「後」にあるとされる本質のほうが存在の真理態であるとされている。この主張は常識的でわかりやすい。ただ、本質が存在の真理態であるならば、存在それ自体は非真理であるというところを見逃してはならない。先の影絵の例で言えば、幕の後のものを実物として捉えるや否や、幕に映っているものはその実物のただの「影」に成り下がる。本当に存在しているのは実物の方だということになる。同様に、本質が

真理であるとは、本当に存在しているのは本質であつて、直接的な存在それ自体は本質ならざるものであり非存在であることを主張している。存在は本質へ、否定されつつ乗り越えられる。

このように、存在という地平を否定的に乗り越えるという形で本質が獲得されるものであることを確認できる。幕に映った像が、その背後の実物との関係に立たされるとき、ただの影に成り下がるように、本質との関係に即して存在は捉え直され、存在の持つ存在論的ステイタスは変更される。この本質へと乗り越えられてある存在こそが、いまわれわれが問題としている「仮象」と呼ばれるものに外ならない。ヘーゲルは仮象を次のように定義する。「存在は仮象である。仮象の存在は、ただ存在が止揚されているということのうちに、存在が空無なものであることの中に存する」(二四六頁)。

さて、以上において本質と存在との関係を論じ、それについて仮象の存在性格を問題とした。一言で言えば、仮象とは本質へと乗り越えられてしまった直接的存在のことである。しかし、本質へと乗り越えられてしまった存在と

いう定義は、仮象の定義としては十分ではない。「本質論」では、本質との関係において捉えなおされた存在の別の形態（たとえば、現象や現実存在）も論じられているのであり、上に挙げた定義だけでは仮象のカテゴリがこれらの形態に対して持つ種差が判明でなく、「本質論」の最初の部分で論じられているというその位置も明確でないからである。結論を先取りするなら、仮象は本質との直接的・一体性の内にあるということによって特徴づけられる、とわたしは考える。そしてこのことが、仮象が後続のカテゴリに対して持つ位置を決定すると思われる。そこで次に、仮象と本質の一体性を説くヘーゲルの論述を再構成してみよう。

## 一―二、仮象と本質の一体性

これまでの議論を通じて、仮象は本質へと乗り越えられ、しまった直接的存在として定義された。そのかぎりでは、仮象は空無なものである。この空無さは、本質との関わりにおいて存在が受けた規定であり、仮象を空無なものとし

て見るのは、実は、仮象の本質に対する関係を見ていることに外ならない。仮象の空無さそれ自体が本質の現れであると言ってもいい。このことを、直接的に与えられた世界が幻のようなものであり、とりとめのないようなものと感ずる場合に即して考えてみよう。

この世界を定まりなく自足しない世界と感ずるとき、より高次の自足的な世界がわれわれに与えられているわけではない。むしろ、自足した世界の不在をわれわれは感じており、そのことでこの世界を定まりなき世界と感ずるのである。しかし、また同時に、まさしくこの不在において、そこに無い、より高次の世界が現れているとも言える。テキストに還るなら、仮象が仮象という性格を持つのは、そこに本質が不在であるからであり、また、本質はその不在ということを通じて自分を示している。仮象も本質も、不在という同一の否定的事態によって規定されるのである。

「（存在の）空無さそれ自体は本質自身の否定的な本性である」（二四七頁）というヘーゲルの主張はこうしたことを意味しているのだとわたしは考える。そして、実は、仮象の段階では存在が本質へと乗り越えられているという否定

的關係しか与えられておらず、その關係から自立した本質や存在はまだ与えられていない。仮象も本質も、本質の不在という同一の事態の二つの側面であり、自立化していないのである。

上述のように存在と本質が自立化しておらず、直接的な一体性の内にあることが仮象の特徴であり、仮象を後続するカテゴリーと区別するメルクマールである。対照をはつきりさせるため、後続する「根拠」のカテゴリーを瞥見してみよう。根拠とは本質の一形態であり、この根拠という本質との關係で捉えられた存在は根拠付けられたものという規定を受ける。この根拠というカテゴリーを叙述するに先だつて、ヘーゲルは先行するカテゴリーの運動をまとめているが、そこで彼は、根拠と根拠付けられたものとの間の媒介は「實在的媒介」であるのに対し、先行する運動は「純粋な媒介」であったと語る。根拠が實在的媒介であるとされるのは、根拠と根拠付けられたものが互いに対して自立化していることによる。それに対して根拠に先行する運動では關係項が自立化していないがゆえに、それは純粋な關係であると主張されている。「純粋な媒介は關係づけ

られたもの無き純粋な關係である」(二九二頁)。これは、根拠に先立つカテゴリーでは本質と存在とがまだ自立化せず、根拠に至つて初めて本質と存在とが自立性を得るといふ「本質論」全体の叙述の構造を示すものである。仮象が本質論全体のなかで占める位置は、したがつて、本質と存在とが直接的な統一の内にあることであると言つていいのである。<sup>(6)</sup>

以上、反省規定を「規定された仮象」であるとするとヘーゲルの発言に注目し、仮象の存在性格と本質論全体のなかでの位置の確定に努めてきた。その結果、仮象が本質へと乗り越えられた存在であるといつても、実はここではこの乗り越えの運動のみが存在し、乗り越えられる存在も乗り越える先である本質も自立化していないことが明らかにした。「仮象とは存在という規定の内にある本質である」(二四八頁)というヘーゲルの主張も、この意味で理解することができる。本質は存在からまだ独立していない。反省規定が本質であると言われるにしても、それはこの仮象と同じように存在と一体的なものであることが予想される。

次に、「規定された」というモメントの内実を考察するため、「反省」のカテゴリの分析に移ることにしよう。

## 二、反省の展開

仮象の構造を分析したわれわれにとって、反省のカテゴリの輪郭をつかむことは困難ではない。なぜなら、ヘーゲルによると仮象と反省は同じものだからである。「反省は仮象と同じものである。ただし、仮象は直接的なものとしての反省である。自己内に還帰し、直接性から疎遠になった仮象を表すためには、われわれは反省 Reflexion という外来語を持っている」(二四九頁)。仮象は本質へと乗り越えられてしまった存在である。より正確には、この乗り越えの運動こそが存在している。しかし仮象の場合では、あくまで存在しているという側面に重点が置かれている。これに対し、この運動という面に重点を置くと、われわれは反省というカテゴリを獲得する。したがって、反省は仮象と基本的に同じものである。ヘーゲルはこの反省のカテゴリを措定的反省、外的反省、規定的反省の三段階に

分けて論じている。以下、その順に考察していこうと思うが、その前に反省論全般に関わる問題を考察しておく。

## 二―一、本質から生み出される存在

仮象についての考察において、存在が本質へと乗り越えられる運動のみが、この本質への関係のみが存在するとわたしは主張した。しかし、関係が存在するとはどういうことであろうか。この場合の存在という概念をわれわれはどのように理解すればいいのだろうか。ここではこの問題を正面から考察したいと思う。

## 二―一―一、本質から導出される存在に ついての形式的考察

「反省はさしあたり、無から無への運動である。したがって自分自身と一致する否定である。この自分自身との一致は一般に単純な自己自身との相等性であり、直接性である」(二五〇頁)。ここでヘーゲルは反省という運動から直

接性を導出する。この直接性は存在の別名であり、こうして存在が反省の運動から導出されているわけだが、しかしながら、無から無への運動が自分自身と一致する否定であるという主張は、即座には了解しがたい。まず、ここで言われている「無」が何を意味するのかを考えてみなければならぬ。

先の仮象の場合に即して考えてみよう。仮象は本質にとつて他なるものであり、また他なるものとしてのみ存在している。この他なるものという規定を離れて仮象の存在はないのであるから、本質との関係が仮象の存在に先行していると言える。また本質のほうに目を転じて、本質は本来的に媒介されたものであり、存在を越える運動としてのみ存在している。したがって、ここでの運動では、徹頭徹尾まず運動ないし関係が関係項に対して先行しており、この関係に先立つならかの存在者は前提されない。関係項は徹頭徹尾関係づけられたものとして、そうしたものとしてみ存在する。ヘーゲルでは多くの場合、関係づけられていることは否定されるということの意味しており、<sup>(1)</sup>それゆえ関係項は徹頭徹尾否定されたものとしてあることにな

る。その意味で関係項は「無」と呼ばれるのである。結局、「無から無への運動」とは、第一次的に存在しているものである本質—存在関係のなかでの関係項同士の間運動を示すものであるといえる。

また、この本質—存在関係とは、存在が本質との関係に即して規定され、同時にこの規定を通じて本質が捉えられているという事態である。したがって、「無から無への運動」が自己と一致する否定であるという主張は、本質との関係を通じて存在に対して与えられた規定がその本質に一致するということを、換言すれば、本質が「自分」の現れに、現れが「自分」の本質に一致するということを言っていることになる。

つぎに、この一致ないし相等性が直接性であるという主張の意味を考えてみよう。言うまでもなく、直接性のドイツ語原語は *Unmittelbarkeit* であり、直訳すれば、非媒介性である。媒介とは本質的に他との関係を意味するものであるから、非媒介性とは他との関係が捨象された状態を示していると言えるだろう。ところで、自己との相等性、自己同一性は他者との関係を捨象し自らに關係することに於いて



成り立つ。したがって、自己同等性は他者との関係ないし媒介を廃したものであり、媒介されざるもの、非媒介的なもの、直接的なものであることになる。

このように考えてみると、本質の運動から存在を導出するヘーゲルの手続きには、単なる概念の連鎖としては、さしたる困難はないと言っている。しかし、問題はそうして導出された存在の意味である。本質の運動から導出された存在とは、いったいなにを意味するのだろうか。この点について具体的なイメージを持つておくことが、以下の考察にとつて必須であると思われる。そこでヘーゲル自身が与えている具体例に即して、この存在の意味について考察してみよう。

## 二——二、自己同等性としての存在の

### 具体的意味

ヘーゲルは、カントの反省的判断力が外的反省に留まるものであるとして批判している。だが、カントの反省的判断力のなかにも、ヘーゲルが考察している反省と同じ構造

が含まれていることを指摘してもいる。その際にヘーゲルがもちいている例は、彼がどういふ事柄に立ち向かつていたのかを窺わせて興味深い。「(カントの反省的判断力は個別的なものから普遍的なものを求める能力であるが、)そこにもまた、絶対的反省の概念が存しているのである。

というのは、規定の運動において目指されるものである普遍的なもの・原理・規則・法則といったものが、規定の運動がそこから始められた直接的なものの本質として妥当し、そのことでこの直接的なものは空無なものとして看做され、この直接性からの還帰ないし反省による規定が直接的なものを初めてその真の存在に即して措定することであると看做されるからである。したがって、反省が直接的なものにおいて行なうもの、反省に由来する規定は、この直接的なものにとつて外的なものではなく、この直接的なものの本来的な存在なのである」(二五四頁)。ここでは、存在が本質への関係の内規定されることの例として、直接的なデータが規則や法則に即して規定されることが挙げられている。このことを手がかりに、ヘーゲルが考えている事柄それ自体に接近してみたいと思う。

たとえば、石が落ちるといふ個別的事象がある。この事象が落体の法則に即して捉えられると、この普遍的法則の現象として捉えられることになる。具体的には、石の落ちるといふ事象が時間・空間の量の関数的関係として記述されるということである。現象自身のうちに見いだされるこの関数的関係こそが落体の法則なのであり、現象の外に別に存在する本体として、本質であるところの法則があるわけではない。したがって、法則に即して事象を捉えるとは、本質を捉えることに外ならない。このように、直接的な事象が落体の法則の現象として把握されるということでは、その事象において本質が捉えられるというに等しい。引用文では、この本質との関係のなかで現象として規定することがその真の存在に即して規定することであると主張され、そして、法則に即して規定されていることが事象の真の存在であると主張されている。

この例にさらに立ち入って考察を加えてみよう。落体の法則の現象といふ在り方が事象の本来の規定を示すものとされたのだが、このように規定された存在様態、すなわち現象といふ在り方は石が落ちるといふ個別的事象とは差

当り独立である。それはあくまで落体の法則との関係における規定であり、この法則との関係なしには存立しない。それは落体の法則との一致において初めて存在性を得る。それでは、本質である法則が真の存在と見做されているのかと言え、事態はそれほど単純ではない。本質は存在との関係を離れては成り立たないというのがヘーゲルの主張であり、落体の法則は個々の事例に適用可能であることを通じて妥当性を得るものだからである。まとめれば、個々の現象は落体の法則と一致することで、落体の法則は個々の現象と一致することで存在性を得る。本質が自分の現象と一致し、現象が自分の本質と一致しているという関係、この本質―現象関係における自己同等性こそ、存在性の基礎であり、この関係を離れては現象はもろろん本質もまたその存在性を失う。ここでヘーゲルは、現象と本質との間の関係こそが存在性の基礎であることを示そうとしているのである。<sup>(8)</sup>

わたしは、本質の運動自体が持つ自己同等性から存在を導出しようとする際のヘーゲルの意図は、こうした本質―現象関係自身に存在性の根拠を置こうとするものだったの

だと思ふ。存在が導出されると聞くと、われわれは感覚が教える外的な事物の存在を連想しがちである。そうした感覚主義的な存在概念を前提しているかぎり、本質運動の自己同等性から存在を導出するヘーゲルの主張は、本質から感覺的外的事物が導かれるかのごとき印象を与えることになり、そしてそこには論理の魔術以外のものは認めがたいことにもなろう。しかし、ヘーゲルはここでそうした存在概念を問題としていてのではない。ここで問題となっているのは、本質―現象関係のうちで存在するという存在である。ここでは感覺的データが与えられているということ(9)が存在性の基準ではなく、本質―現象連関こそが存在性の基準なのである。

以上の考察の結果得られた存在概念をもとに、今一度仮象の存在性格を解明してみよう。「(仮象という)空無なものあるいは本質なきものは、しかし、そこにおいてそれが映現する他のものうちに存在を有するのではない。そうではなくて、その存在はそれ自身の自己同等性なのである」(二五〇頁)。このように主張されるのも、既述の意味においてであると思ふ。われわれはしばしば、本質との関

係に入る前の直接的な存在者があるように考えがちである。その場合、その直接的なものを本質との関係のなかに置いた結果得られた規定が仮象という規定であり、仮象はその前提された直接的な存在者において存在を有していると考えられる。しかしながら、このような理解をヘーゲルは退ける。それは、そのような本質との関係に入る前の直接的な存在は、そもそも仮象という規定とは無関係であるからだ。先の落体の法則の現象という規定が石の落下という事象とは差当り独立であり、法則との関係こそが現象として存在することの内実であったように、仮象は本質との関係においてははじめ仮象なのであり、この関係こそが仮象の存在性の根柢なのである。

## 二―二、絶対的突き返しとしての措定的

### 反省

以上、われわれは、本質の運動の同一性から導出される存在が何を意味するのかを考察してきた。この考察によって、反省の運動についての具体的なイメージを獲得するこ

とができたと思う。そこで次に、措定的反省自身の運動を、これまでの成果をもとに辿っていくことにしよう。その結果、反省論の対象とする実在がいかなる構造を持つものであるかを、われわれは知るだろう。

仮象の空虚さとは本質との関係に即した規定であったが、このように本質との関係のなかで規定された存在をヘーゲルは「措定された存在 (Gegebenin)」と名付ける。

「この否定的なものの自己への関係は、この否定的なものの自己への還帰である。この関係は否定的なものの止揚として、直接性である。しかし、それは、単にこの関係としての、あるいは一なるものからの還帰としての直接性であり、自分自身を止揚する直接性である。これが措定された存在である」(二五一頁)。この引用文には、反省というものの根本構造が凝縮された形で述べられている。そこで、この引用に解釈を与えるという仕方、これまでの解釈をまとめ、さらに詳細に展開してみよう。

引用部冒頭に登場する「否定的なもの」とは、本質―存在関係のなかでの規定である。この否定的なものが持つ自分自身への関係とは、本質が自分自身の現れに、現象が自

分自身の本質に関わっていることに外ならない。ここで注目すべきなのは、こうした自己同等性が「否定的なもの」の止揚とされている点である。繰り返しを恐れずに言えば、「否定的」とは本質―存在関係のうちでの規定である。前節で確認したように、この関係が持つ自己同等性が存在性の内実であり、この関係と存在とは切り離しがたい相即性のもとにある。それが、ここでは、この関係の止揚として存在が語られている。これはどういうことなのであろうか。この問題に答えるためには、本質―存在関係のなかで規定を受けるといことがどういことなのか、さらに立ち入って考察してみなければならぬ。

本質論においては、互いに固有なパートナーであるような対規定の間の対立区別を通して、規定が成立する。たとえば、根拠のカテゴリーを取り上げるなら、なにかが根拠という規定を受けるのは、根拠付けられたものとの関係を通じてのことである。根拠と根拠付けられたものとは対をなす規定であり、相手に対する対立区別を通じて成立する。一般に、様々な本質の形態は、それに相関する存在の形態との対立区別を通じて規定されるのである。このよう

に、本質―存在関係において、規定は本質―存在の間の対立区別の関係を通じて成立するのである。次に、自己同等性がこうした規定の止揚であるという思想の吟味に移ろう。

二―で考察したように、本質と現象との間には自己同等性の関係がある。本質は自分の現象と関わり、現象は自分の本質に関わるものだからである。この本質―現象関係における自己同等性に存在性は支えられていることをヘーゲルは示した。今問題となるのは、この存在性がどのような仕方で本質―現象関係に関わるか、である。すでに示されたように、現象は、本質との関わりを通じて現象として存在する。ここで注意しなくてはならないのは、現象の存在が同時に本質の存在でもあることである。本質は個々の事例に適用されることにおいて妥当性を持ち、存在する。換言すれば、個々の事例に現象することにおいて本質は存在している。現象が存在するとは、媒介的な仕方で本質が存在することなのである。したがって、現象の存在と本質の存在とはべつなものではない。本質―現象関係における自己同等性が、本質にとっても現象にとっても、同じよう

に存在性の基礎を成しているのである。

本質―現象関係を通じて構成される存在は一つであり、そこにおいて存在しているのは、厳密には本質―現象という関係態それ自体である。ただし、この関係態の内的構造に呼応して、ここでの存在は複雑な構造を持っている。ここで直接的に存在するものは現象である。しかし、現象とは本質の現れなのであって、本質はこの現れに媒介されて存在している。現象とは直接的なものであり、かつ、自分以外のもの（本質）の現れでもあるようなものである。このように、本質―現象関係において構成される存在とは、直接性と媒介性とを総合した、構造化された存在なのである。現象は直接的に存在するものとして、本質はこの現象という現れを介して媒介的に存在するものとして、この共通の存在性に与っている。だが、存在性というその一点だけにに関して言えば、そこには本質と現象の区別はなく、一つの存在である。したがって、もし、この存在性ないし自己同等性の面だけに焦点を合わせるなら、本質と現象との対立的区別は度外視されることになる。これが、自己同等性が否定的なものの止揚であるとされたことの具体的内容

であると考えられるのである。

自己同等性に注目すれば区別は視野から外れ、区別に注目すれば共通の存在性が分断される。このふたつの要素は互いに他を排除する。先の引用部で自己同等性が「否定的なもの止揚」であると言われたのは、このふたつの要素の相互排除的關係を指摘したものとして理解することができ。しかし、本質―現象關係は自己同等性を含んだ關係であり、また自己同等性は本質―現象の關係を離れては存在しないから、このふたつの要素は相互に前提しあっている。先の引用に言う「自分自身を止揚する直接性」という表現は、直接性ないし存在が、区別対立の關係を離れてはあり得ないことを意味している。区別と同一性という互いに並立しない要素が同時に存立するという矛盾を本質關係が持っていることを、ヘーゲルは主張する。この意味で、本質は「自分自身であり、また自分自身でない。それも一なる統一の内で、自分自身でありかつ自分自身でないのである」(二五〇頁)。

措定的反省とは、規定の側面に重点を置いてこの事態を叙述するものである。「反省が還帰としての直接性である

かぎりにおいて、反省は措定である」(二五一頁)。「還帰として」という表現は、直接性(存在)が本質との關係のなかにあることを示している。二―一の例で、事象が法則という本質に即して捉えられることが「直接的なものからの還帰」と呼ばれていたことを思い起してもいい。措定的反省とは、本質との区別を通じて規定することである。しかし、この本質―現象關係のうちには自己同等性も含まれており、この自己同等性こそが存在性の内実をなすものであることはすでに確認したとおりである。「さらに言えば、この直接性は止揚された否定であり、止揚された自己内還帰である」(二五一頁)と言われるのもこの意味のことである。相反するものである区別対立と自己同等性が、ここにはともに含まれている。この自己同等性のほうに重点を置いて先の根本事態を叙述したものを、ヘーゲルは「前提 Voraussetzen」と呼ぶ。

措定的反省の段階では、自己同等性と区別対立とが相即的であることは示されない。それらは潜在的に相即的であるにすぎず、ふたつの要素の間の相即性は、一方を立てると直ぐに他方に移行する運動として現れる。この運動を

ヘーゲルは「絶対的突き返し *absoluter Gegenstoß*」と呼んでいる。この絶対的突き返しこそ、措定的反省が反省論全体のなかで占める位置価を示すものであるとわたしは考える。ふたつの要素がそれ自体において一なることが示されていれば、一方から他方への絶え間ない転換は起こらない。自己同等性がそれ自体として区別関係であること、つまり存在がそれ自体において反省であることを示すのは、措定的反省に続く外的反省の役割となる。

## 二―三、存在と反省の同一性を示すものである外的反省

さて、以上きわめて概略的にはあるが、措定的反省の叙述を辿ってみた。まとめておくなら、措定的反省では区別対立関係を通じて生じた規定に重点が置かれていた。しかし、前節で見たような本質―存在関係の一般的構造から、措定的反省は別の形態の反省に移っていかざるを得ない。本質―存在関係には、規定を可能にするところの区別が必ず含まれている。区別されるものは、互いに対して他

者である。「しかし、同時にこの直接的なもの否定的なものとして、つまりなにかに直接に対立しているものとして規定されている。したがって他者に対立しているものとして規定されている。したがって（反省は直接的なものとして他者であるという規定を受けることになり）反省は規定されている」（二五二頁）。このような反省と存在との間に他者という関係が支配的になるとき、存在は反省に比べて他なるものとなる。そのことによって、反省は存在にとって外なるものという規定を受けることになる。他者としての存在を前提し、そこから出発する反省、それが「外的反省 *äußere Reflexion*」である。

この外的反省と呼ばれるカテゴリーが扱うのは、外的な存在を対象として持ち、これに思惟を通じた規定を与えるような反省である。その意味で、外的反省はわれわれが通常考える反省作用に近いものであると言っている。データとなるような事象の存在が前提され、思惟はこの事象に外的に関わる。たとえば、石が落ちるといふ事象が与えられたとき、この事象に対して思惟は落体の法則の現象という規定を与える。しかし、この規定は単に思惟による規定で

あつて、最初の石の落下という事象にとつて外的なもので、その意味で客観性を持たぬ主観的な規定にとどまる。

これは、直接的な存在が反省にとつて他なるものという規定を受けるという、外的反省自身の内的な構造からの帰結であるが、もしこの外的反省の立場に立つなら、およそすべての本質は思惟が設定したものにすぎないことになり、客観的な実在とは関係のない主観的なものとなつてしまふだらう。本質が客観性を持ち、実在自身にとつて内的なものであることが示されねばならない。これが、外的反省というカテゴリーを叙述する際の、ヘーゲルの目標である。

この目的をはたすために、ヘーゲルは外的反省の根本前提である、反省と存在とが相互に外的で他者であるという関係に目を向ける。この関係をよく考えてみると、ここで論じられている存在は反省にとつて他なるものという規定を受けていることが気付かれる。したがつて、外的反省が前提している存在は無垢なものではなく、反省にとつて他なるものであるという、反省との関係を通じた規定をすでに受けている存在である。このことをヘーゲルは次のように表現する。「しかし、外的反省の動きをさらに考察して

みると、外的反省は直接的なものを措定しており、この直接的なものはそのかぎりにおいて否定的なものないし規定されたものとなる」(二五三頁)。反省にとつて外的であるという規定は反省との対立によつて生じた規定である。なにかが反省にとつて外的なものとして存在するのは、反省との関係を待つて初めて成り立つことである。二―一の最後で論じたように、仮象が本質にとつて否定的なものとして存在するのは、外ならぬ本質との関係を通じてであつたのと同様に、反省にとつて外的であるという存在は反省との関係を通じて構成されたものなのである。一言で言えば、外的反省で問題とされている根本事態は、反省―他なる存在という、それ自体ひとつの本質―存在関係なのである。

外的反省は反省にとつて外的な存在を前提する反省であつた。そのように前提される存在とは、実は、反省―他なるものという関係を通じて構成された存在なのである。こうした関係において存在が「前提」されることは、二―二で見たように、規定を成立させている区別対立の止揚として捉えられる。そのかぎりで、存在と反省との間に存立し



た、相互に他なるものという区別対立も止揚されているといえる。そこで、先の引用部に続いてヘーゲルは次のように言う。「しかし、外的反省はこの措定を直接に止揚している。というのは、外的反省は直接的なものを前提しているからである」(二五三頁)。このような外的反省の構造は措定的反省と同じであることが気付かれる。つまり両者は、区別対立の設定とそれの止揚という同じ運動を行なっている。

こうした議論を通じて、ヘーゲルは思惟にとって端的に外なるものを前提する哲学上の立場が持つ困難を指摘しているように思われる。時にわれわれは、対象が思惟の手の届かない彼方にあることを思う。しかし本当は、こう思ったときすでに、われわれはその対象を思惟してしまっている。つまり、われわれの思惟の外なるものとして考えてしまっている。本当にわれわれの思惟の届かない先は、われわれはそれを考えることさえできない。したがって、それはわれわれの思惟の外という規定を受けることさえない。その意味で、思惟にとって外的であるという規定も、やはり一つの規定なのである。

まとめておこう。外的反省においては、存在は反省にとって外的なものとして前提された。しかし、この前提それ自体が反省の生み出したものであり、反省によって止揚されるものであることが示された。このことで、反省が存在にとって外的なものではなく、むしろ内的なものであることが示されたのである。「直接的なものは反省を通じて反省にとって否定的なものとして、あるいは反省にとって他なるものとして規定された。しかし、反省自身がこの規定を否定するものなのである」(二五三頁)。かくして、外的反省と措定的反省が統一される。このふたつの反省の統一として導入されるのが、「規定的反省 Bestimmende Reflexion」である。

## 二一四、これまでの運動の総括としての 規定的反省

先へのべたように規定的反省は措定的反省と外的反省との統一として把握される。ここにおいて初めて、われわれは措定的反省と外的反省が反省論全体のなかで持つ位置

を見極めることができる。措定的反省が立てる「措定された存在」は本質―存在関係に即して立てられた規定である。しかし、そこではこの本質―存在関係と、この関係自身における自己同等性において成立する存在とが相即的であることは顕在化していなかった。もちろん、反省の構造自身から明らかのように、本質―存在関係と存在は相即的なものであり、深層構造に注目すれば措定的反省の段階でも本質―存在関係と存在は相即的なものである。そのため一方が立てられると即座に他方が立てられるという運動が生じる。しかし、両者の相即性が顕在化していず、両者の間の対立が前面に出ているがゆえに、一方が立てられると他方が立てられるという運動は、他方を自分から開放するという様相を呈したのである。その意味で、措定的反省の段階にあつては、「直接的なものは自己内還帰に対する絶対的な関係を持っており、自己内反省のうちにあるものであるが、この反省自身ではない」(二二五頁)と主張されるのである。

この点に、次の外的反省が登場してくる必然性があつたと言える。措定的反省ではまだ示されていなかった両者の

相即性を示すことが外的反省の課題だった。外的反省の運動は、存在が反省にとって他なるものであるという前提を廃棄し、反省が存在にとって内的なものであることを示した。一言で言えば、反省が存在することが示されたのである<sup>(10)</sup>。「したがって、措定された存在はそのものとしては否定であるが、前提されたものとして自己内還帰した否定である。かくして措定された存在は反省規定である」(二五六頁)。かくして、われわれは本稿における論究課題であつた「反省規定」の概念を得る。それは「自己内還帰した否定」であると呼ばれる。ここでの自己内還帰は、自己に戻って自己と一致することを示し、われわれが自己同等性という概念のもとに論じてきたところのものである。したがって、反省規定とはそれ自身において自己同等性を見えた否定である。換言すれば、それ自身において存在性を備えた本質規定に外ならない。

これまでに論じてきた構造に即して、この事態をまとめよう。本質は現象との対立区別を通じて、現象は本質との対立区別を通じてそれぞれ規定されるものであつた。しかし、本質は自分の現象と関わり、現象は自分の本質と

関わるものであるから、ここには自己同等性も含まれている。この自己同等性が存在性の内実を成し、本質—現象関係は、自分自身が持っている自己同等性において存在する。また、この関係の存在は、関係自身の持つ内的構造に依りて複雑な構造を持つものだった。すなわち、直接的データである現象の存在が、同時に、そこに現われている本質の媒介された存在でもあったのである。

いまや、こういった自己同等性による存在性と本質—存在関係との相即性が反省論全体の運動を通じて顕在化された。反省諸規定とは、存在性をそれ自身に具えた本質—存在関係の内部構造を、言い換えれば自体的に存在する否定性の構造を記述するものである。

しかしながら、本質—現象のように、関係項がはっきりと自立化した形の本質関係が論じられるのは実際にはずっと後のことであり、ここでは本質論冒頭部という位置価値を顧慮しておかなくてはならない。仮象を論じた際、わたしは仮象において存在するのは差当り本質への関係だけであって、その関係から自立した存在も本質もまだ与えられていないと主張した。今、反省規定の構造においても、同じ

ことが指摘できると思う。もともと反省とは、仮象と同じ根本事態を論じたものであった。ただ、仮象は直接性ないし存在の面に重点を置き、反省は否定ないし本質への関係に重点を置いているという違いだけである。反省論の展開は、この本質への関係、否定こそが存在することを示した。その成果が反省規定である。その意味で、反省規定はそれ自身において関係であるような規定であるというヘーゲルの主張を理解できるのである。

#### 結語

「これらの諸規定は、本質のなかにあるところの規定された仮象、本質的仮象である」という命題を手がかりとして、われわれはこの論究を始めたが、これまでの考察からこの命題の意味するところが明らかになった。「同一性」、「区別」、「矛盾」といった反省規定は、仮象と同様に関係項が自立する以前の本質—存在関係において成り立つ規定である。しかし、それは仮象とは異なり、規定が存在性をそれ自身において具えていることが示された規定

であり、そのことは反省論を通じて示された。そして、本質論全体の叙述の秩序のなかでは、反省規定は関係項が自立する「根拠」のカテゴリに先行し、このカテゴリを準備する箇所位置する。とりわけ「矛盾」は、存在と本質とが分離自立化する分岐点に位置しているのである。そうした反省規定の叙述自体を追跡することが新たな課題として生じてくる。しかし、ここでは反省規定の生成を再構成し、そのことを通じて、反省規定を理解する上で前提される独特な存在概念、独特な規定の構造を説明したことをもって満足しようと思う。

\*ヘーゲルからの引用はGesammelte Werkeの十一巻の頁数を示した。なお、丸括弧内は筆者による補いである。

註

(一) V. Hösle, Hegels System, 1988, S. 156ff.

(二) K. Düsing, Identität und Widerspruch, in: Giornale di Metafisica, ca. 6, 1984, S. 326.

「十九世紀以来今日まで様々に公表されてきた見解とは逆で、ヘーゲルは存在論的な矛盾だけでなく、論理的な矛盾をも犯している。それも、思弁的形而上学的動機から、矛盾を犯している」。

(三) H. Schmitz, Hegels Logik, 1992, S. 23. 「まったく正当に、ま

た説得的なテキスト上の証拠を以て、K・デュージングは(上記の注のように)「定式化している。(中略)これは正しいが、(ヘーゲルの)弁護者に対する非難としては完全ではない。ヘーゲルが言っていることは、ヘーゲルの論理学が行なっていることから区別されねばならない」。

(4) このように考える解釈者としては、Ch. Iber, Metaphysik absoluter Rationalität, 1990, S. 16 f., S. 243. もちろんわたしも、反省論における矛盾が「論理の学」全体のなかでも重要な位置を占めることを否定しない。しかし、それは、「論理の学」が描き出す实在の構造の全体なかで、矛盾が占める位置によることである。

(5) この関係について、わたしは判断論との関係から論じたことがある。「反省と判断」「哲学論叢」一九号、一九九二年。

(6) ロースも同様の指摘を行なっている。P. Rons, Form und Grund, 1982, S. 55. 「純粋な媒介から實在的媒介への発展」、つまり、最初のものとしての本質から根拠としての本質への発展の内実は、「本質と存在の」区別が出て来るということのなかにある」。ここでロースは本質と存在の自立化を、区別という言葉で表している。わたしは、しかし、本質と存在とは仮象の段階でも区別はされていると考える。そうでなければ、両者を別々に論じることの意味がなくなる。両者が自立化するには、両者それぞれが自己同等性を具えることが要件であり、仮象ではそれが達成されていなければならない。

(7) ヘンリッヒも、否定の基本的意味と関係のうちに見ていませ。D. Henrich, Hegels Logik der Reflexion, in: Hegel-Studien Beiheft 18, 1978.

(8) この存在概念は、ヘーゲル論理学のなかで自然学的認識の基礎を論じる際に重要な役割りを果たす。拙論「ヘーゲル論理学における科学的知識の成立」「アルケー」二号、一九九四年。

「論理の学」「概念論」の客観性の章では、力学・化学・目的論といった自然学のカテゴリーが論じられているが、この客観性という存在の在り方が個別的な存在と普遍的本質との一致を通じて獲得されることを、わたしは前掲論文で示した。これが、今われわれが論じている構造と対応するものであることは明白であろう。

さらにヘーゲルは、この存在と本質との一致の完成態を理念のうちに見て取り、次のようにも語っている。「理念が概念と実在性との統一であることによつて、存在は真理の意味を獲得した」(十二卷一七五頁)。理念が、真理という意味を獲得した存在であるというこの主張の意味も、われわれが今問題としている構造から解釈されるものと思われる。

なお、このように存在概念の多様な意味を探究するヘーゲル論理学と、存在の意味をカテゴリー存在、可能現実としての存在、真理存在に分類したアリストレスの存在論との関係は興味深い問題であり、稿を改めて論じてみたい。

(9) 以上の具体例では、本質と現象といった、「本質論」のなかでもずっと後で論じられるカテゴリーが考察された。したがって反省論に関する例としては必ずしも適切ではない。しかし、事柄を見るためには好便な例であり、モデルケースとしての機能をはたすものと思う。

(10) イーバーはこうしたことを次のように言い表している。「この合致は、本質的な直接性を構成する。したがって、自身自身を否定する反省と直接性とは直接性の側において同一的なものとして指定されている」。Ch. Iber, *Ibid.*, s. 190f. この把握は的確であり、外的反省から規定的反省への移行は、前提がすでにそれ自体指定であることを示すことにあるとする彼の理解は正確である。しかし、その過程の分析は説得的ではない。イーバーによると、直接性も一つの規定であり、この直接性を前提するとは直接的なものとして規定すること、すなわち指定することに外ならな

い。このことが示されることで規定的反省に移るというのだが、これでは、この指定が直接性が前提されることによつて止揚されるというヘーゲルの主張が、意味をなさなくなると思われる。

den Handlungsfolgen abhängen. In Bezug auf die zweite Ähnlichkeit kommt es für die Regelutilitaristen auf das allgemeine Glück als Konsequenzen der allgemeinen Praxis nach einem Grundsatz an. Für Kant kommt es aber darauf an, ob die Maxime oder der Wille selbst sich selber nicht widerspricht, und nicht darauf, ob das Glück als Handlungsfolge hervorgebracht wird.

In diesem Artikel möchte ich durch die Betrachtungen über diese Probleme die Einstellung Kants als Deontologen aufklären.

## Schein und Reflexion

- eine Interpretation eines Kapitels der Wissenschaft der Logik Hegels -

Masao YAMA WAKI

Der Hegelsche Gedanke über den Widerspruch wird auch noch heute vielfach diskutiert. Um diesen Gedanken richtig aufzufassen, muß man die Widerspruchstheorie, die Hegel im Abschnitt der Reflexionsbestimmungen in der Wesenslogik dargestellt hat, zuerst analysieren. Da aber Hegel die Reflexionsbestimmungen als "bestimmter Schein" bezeichnet hat, müssen die Bedeutungskonstituenten "bestimmt" und "Schein" vorerst erläutert werden.

Der Schein kann als wesenloses nichtiges Sein definiert werden. Nach Hegel kommt diese Nichtigkeit aus dem Wesen selbst, weil das Sein erst dadurch als nichtig bestimmt wird, daß es sich auf das Wesen bezieht. Mit anderen Worten stellt auch die Wesenlosigkeit, die den Schein charakterisiert, eine Beziehung auf das Wesen dar. In der Nichtigkeit des Scheins erscheint also das Wesen selbst. Diese Nichtigkeit ist nun die einzige Bestimmung, die am Beginn der Wesenslogik gegeben ist. Das Sein wie auch das Wesen haben auf dieser Stufe keine andere Inhaltsbestimmung darüber hinaus. Daraus ergibt sich, daß Sein und Wesen auf der Stufe des Scheins noch nicht verselbständigt sind, wenngleich sie allerdings unterschieden werden können. Aus dieser Unselbständigkeit erhellt sich der Stellenwert, den der Schein in dem Darstellungsgang der Wesenslogik hat.

Die andere Bedeutungskonstituente der Reflexionsbestimmung ist die der Wesenslogik eigentümliche Bestimmtheit, deren Bedeutung durch die Relation von Sein und Wesen determiniert wird. Die Wesensbestimmung steht immer in dem Korrelationsverhältnis mit der ihr korrespondierenden Seinsbestimmung und ihre Bedeutung wird durch dieses Verhältnis bestimmt, wie z.B. die Bedeutung der Wesensbestimmung 'Grund' durch die Beziehung auf die Seinsbestimmung 'Begründetes' als ihr Bedeutungskorrelat entschieden ist. Auch die Reflexionsbestimmungen gründen auf der Relation von Sein und Wesen. Aber unsere Überlegung über den Schein zeigt, daß das Sein und das Wesen am Beginn der Wesenslogik noch nicht verselbständigt sind. Die Reflexionsbestimmungen sind Bestimmungen sowohl des Seins als auch des Wesens, wie die Nichtigkeit des Scheins auch die Bestimmung des Wesens war. Dies gilt auch für den Widerspruch als eine der Reflexionsbestimmungen.